

## エピローグ：モノとコトの世界からヒトの世界へ

物語は終幕となった。ただ、現在も進展を続けている物理の話はできなかった。多種多様な物質の性質を調べる物性物理学や統計力学の成果にふれていないし、素粒子物理学や宇宙物理学もその入口を紹介したにすぎない。それでもあなたが、モノとコトの世界のあらましをつかんだことを願っている。

ヒトは自分のいる世界に対する好奇心を自然の欲求としてもっている。それがこの世界でのヒトの生き方に関係しているからである。自分のいる世界はどのようなものか、わたしは何者か、どのように生きればよいか、...という問いを問い続けることが人生の大事だと賢者は言っている。それゆえ、モノとコトの世界の知識はヒトの世界へ架橋されるのでなければならない。その橋をかける作業は、あなたやわたしのそれぞれが苦勞して為すべき営みである。その際、一度橋の途上に立ち止まって兩岸を眺めることが必要だと思う。ここまで言わば分析的にモノとコトの世界を見てきた。そこからヒトの世界に立ち戻るには、総合の過程が不可欠だろう。そうして、生身の人間として身心がその中にある等身大の世界で、自然と人間について考えを巡らせるのである。

.....といったような身のほどもわきまえないことを呟きながら、語り部は橋懸りから退場することにしよう。

## あとがき

最近の科学解説書、特に欧米のものには大量の参考文献が載せてある。たしかにその礼をとるのが筋である。この書物もすべて先人の語ったことを再編しているのにちがいがなく、重要と考える話題の選択と配置や語り方にしかオリジナリティはない。しかしこの本では、福沢諭吉のひそみに倣って、消化不良の疑いがあるけれども、参考文献を挙げる労を惜しむ。教科書とちがう書きぶりをしているつもりなので、索引も付けないことにした。

とはいえ、優れた物理学者が物理を語った名著を紹介することは、読者にとって有益だろう。朝永振一郎著『物理学とは何だろうか』(岩波新書)とR.P. ファインマン著『物理法則はいかにして発見されたか』(岩波現代文庫)の2冊を挙げよう。もう1つ第8章末尾の宇宙論の要約は、佐藤勝彦著『宇宙論入門』(岩波新書)を下敷きにした。感謝をこめて言い添える。そうになると、語らなかつた素粒子論についても1冊紹介した方がよいだろう。わたしの書棚に南部陽一郎著『クォーク—素粒子物理学はどこまで進んできたか』(講談社ブルーバックス)がある。不勉強のため物性物理学の解説書を挙げるができない。

問題はこの本の出来栄であるけれども、本当に自信がない。ただ読者がわたしの非力を補って読んでくださることを祈るばかりである。

原稿を読んでこの本の改善に手を貸して下さった岡本良治、田崎茂のお二人にお礼を申し上げたい。文章を作っていく期間家族の支えがあったことを言い添える。